

サイ・テック知と技の発信

【1】

埼玉大学・理工学研究の現場

■ノーベル賞

2010年のノーベル化学賞に日本人として鈴木章・根岸英一両博士が選ばれたことは記憶に新しい。対象となった業績はクロスカップリング。テレビや新聞などでその内容がやさしく解説され、自らは変化しない触媒を使って、有機化合物を炭素同士で結合させる反応であること、医薬品や液晶などに応用されていることは、今や多くの人々の知るところとなった。

■国民との対話

一方、今年6月には科学技術政策担当大臣により「国民との科学・技術対話」の推進に関する基本取組方針が公表された。その趣旨は、科学・技術をより一層発展させるためには、成果を国民に還元することでも、国民の理解と支持を得て、共に科学・技術を推進していく姿勢が不可欠、ということにある。

背景には、「一番でなくてはダメなのですか」に象徴される事業仕分けでの議論や、概算要求「元気な日本復活特別枠」に対する政策コンテ

トの考え方があろう。科学・技術関係施策の充実を図るためには、研究者が社会と直撃し(ユニバーシティ)の取り組みが重要である。

■元気な日本

資源に乏しい日本が人類社会に貢献する途の一つとして、独自の優れた科学・技術を築くことを考え、我が国は「科学技術創造立国」を宣言している。科学と技術の発展とそれを支える次世代人材の育成が元気な日本復活の一つの鍵を握っている(とすること)に異論はなからう。

実際、ノーベル物理学賞・化学賞の日本人受賞者がこの10年で合わせて10人となったことは日本を元気にさせた

科学・技術対話への第一歩

山口 宏樹 埼玉大学大学院 理工学研究科長



し、若い人達に科学や技術への夢を与え、復活に向けた人材の底辺拡大に少なからず寄与している。

■まずは発信

「このような状況の中、埼玉大学大学院理工学研究科では、基礎研究を重視しつつも、成果を社会に還元する科学と技術を目指して、研究に根ざした人材育成を進めている。その核となるのが、2000人あまりの教員が生命科学、物質科学、数理電子情報人間

支援・生産科学、環境科学・社会基盤の5分野において、それぞれに行っている科学(サイエンス)と技術(テクノロジー)に関連した研究である。

「この「サイ・テック」では、毎回、これらの教員がその研究内容をできるだけ分かりやすく紹介する。理工学の研究成果のすべてが、人々の明日の生活や経済発展のためにすぐに役立つというものではないし、「分かりやすく」というのも簡単ではないが、

まずは発信を試みる(こと)とした。

埼玉県民の皆様には、今、埼玉大学でどんな理工学研究が行われ、どんな成果が得られているかに目を向けていただき、ご感想やご意見をぜひお寄せいただき、私たちの対話への第一歩としたい。

◇ ◇ ◇
山口 宏樹氏(やまぐち・ひろき) 52年生まれ。埼玉大学、東京大学大学院卒。94年埼玉大教授。工学部長を経て2010年4月から現職。専門は社会基盤構造工学。著書に「構造振動・制御」など。

埼玉大学の研究者たちは、宇宙や素粒子の謎に挑み、パズルのような数学からDNAに迫ったり、脳の構造解明、ものづくりの匠の技の伝承システムなど、意外なこと、興味深い、さまざまなことを研究しています。それらの現場からのコラムを、毎週水曜日に連載します(来週は11月2日付に掲載)。

ご意見、ご感想を編集局産業経済担当まで、お寄せください。

埼玉経済

企業、団体商店街などの話題や情報をお寄せ下さい
TEL 048・795・9161 FAX 048・653・9040